

# レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT



1月18日、プレゼンテーションにて

## 地域の特性をプロダクトに 52名の匠が「世界」へ発信

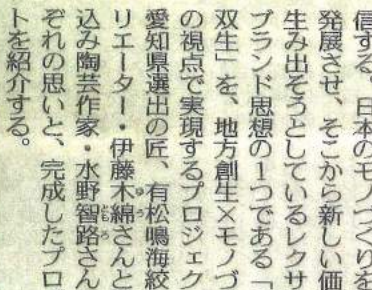
「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催・レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発注。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



伊藤木綿さん(左)のエリア・コンサルティングは生駒氏と

「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。



水野智路さん(左)のエリア・コンサルティングは下川氏と

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え、発展させ、そこから新しい価値を生み出すとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。愛知県選出の匠、有松鳴海絞りクリエーター・伊藤木綿さんと練り込み陶芸作家・水野智路さんそれぞれ、完成したプロダクトを紹介する。

スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

## 雨の日が楽しくなる

## 「有松鳴海絞り」



伊藤 木綿 愛知県/有松鳴海絞りクリエーター

完成プロダクト「絞り染めレインコート『haneru』」

## 新素材で絞り染めのレインコートを

江戸時代から400年以上もの歴史を誇る「有松鳴海絞り」は、名古屋市有松地区の伝統工芸。日本屈指の絞り染めの産地で、藍染めの浴衣などがよく知られている。

その伝統の世界に新風を吹き込んでいくのが、伊藤さんと村口実梨さんのユニット「まり木綿」。名古屋芸術大学の同級生だった二人は学校の授業で有松鳴海絞りと出会い、その魅力に引き込まれる。「藍もいろいろ、カラフルでポップな絞り染めがあってもいい」。次第に二人は、伝統を重んじながらも、独自の染め物を生み出すように



完成品はバイヤーからの注目も集めた

なる。そして2011年、自分たちのブランド「まり木綿」を立ち上げ、有松にお店を開店させた。



プロダクトの説明をする伊藤さん(左)

開店当初、商品は手ぬぐいや地下足袋だけだったが、お客さんの要望を取り入れ、がまぐちやカードケースなど気軽に使える商品も次々と制作。「まり木綿」のモットーは「伝統は見るものではなく、日常で使い、楽しむもの」。柔軟な発想で、有松鳴海絞りの可能性を追求しようとしている。



伊藤 木綿 有松鳴海絞りクリエーター

愛知県出身。村口実梨とともに有松鳴海絞りユニット「まり木綿」として活動。名古屋芸術大学デザイン学科テキスタイルコース在学中に、京都和装ブランドSOU・SOU店舗で商品化が実現したことをきっかけに、卒業後、有松にお店をオープン。絞りの新しい可能性を見だし、産地の継承になっていけたらと活動する。「伝統は鑑賞するものではなく、使い続けていくこと」がモットー。

## 新しい発想やアイデア、出会いに刺激を受けて



生地を織り込んだ後に染め、柄を作る

プレ・プレゼンテーションに臨んだが、サポートメンバーからは「絞りの柄がはっきり出ない方が男性は着やすい」「染めムラもシワも風合いがあつていい」と評価された。「これまでたくさん苦労があったが、意見をいただき新しい発想ができたし、前向きな気持ちになれた」と伊藤さんは振り返る。



まり木綿が活動する有松の風景

約一年間、プロジェクトに参加した感想を聞くと、「普段は客観的な意見を聞く機会が少ない。今回、自分の好きな分野で活躍されているサポートメンバーの意見をいただき、自分たちでは思いつかないようなアイデアが次々出てきたのが刺激的だった。新聞社に取材されて作品が広く発信されるのも、モチベーションにつながった」。また、プレゼン会場の伊藤さんの商談ブースには、百貨店のバイヤーが訪れたり、「ユニクロの誘いがあるなど貴重な出会いもあった」という。「この出会いは、必ず次へつなげていきたい」と意欲を燃やす伊藤さん。

伊藤さんにとって参加は大きな転機となり、今まで以上に強くなった想いは、「有松鳴海絞りだから買おう」ではなく、「この商品、スニーカー」と買ってくれたものがまたま絞り染めだった。が理想。魅力的なモノを作り続けて、有松鳴海絞りをもっと盛り上げていきたい。それは、「まり木綿」の大きな夢でもあると瞳を輝かした。